

篠原嶺葉作歌
高峰筑風作曲

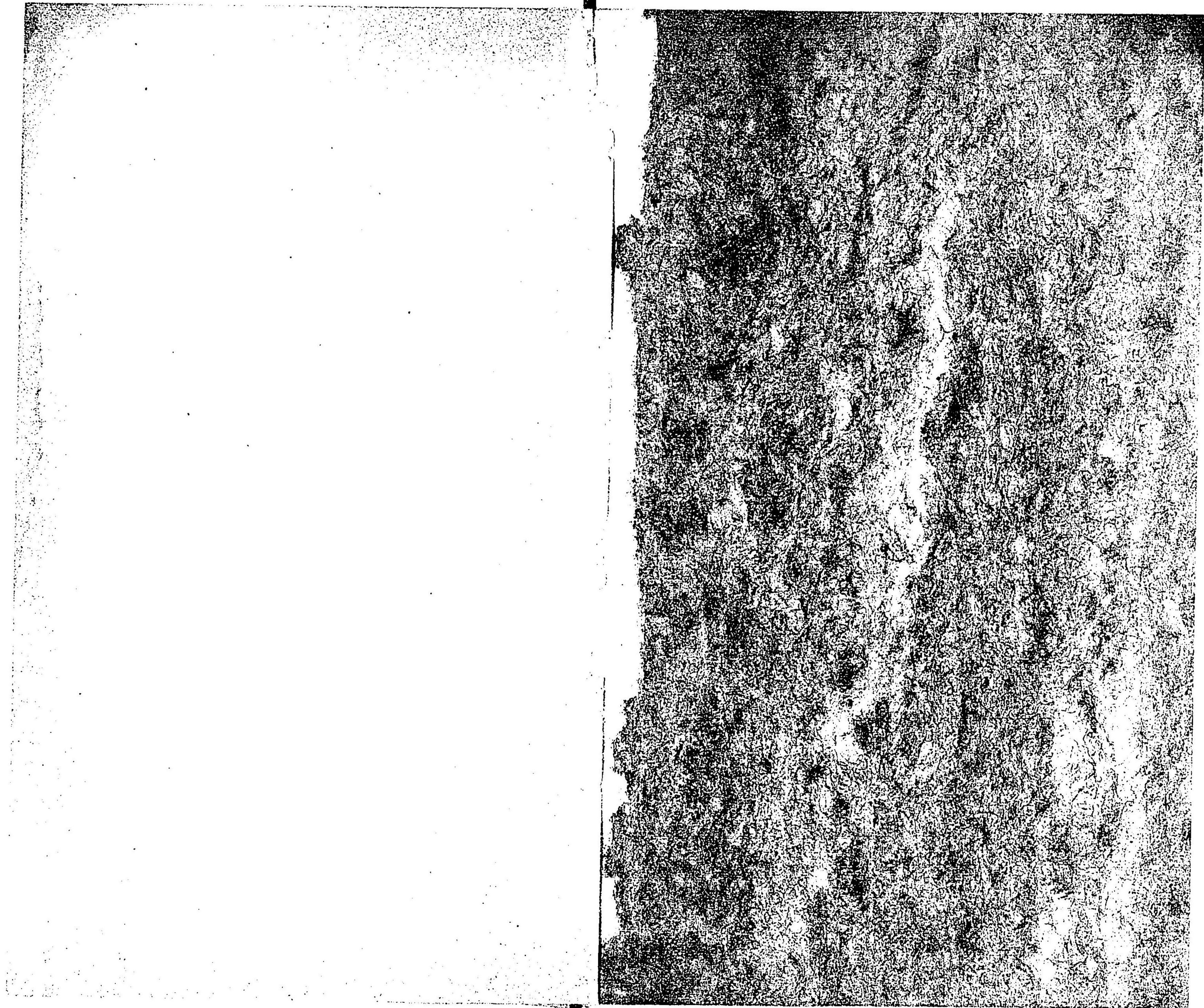
獨創
新曲

高峰琵琶歌

第一卷

267

204



序

本篇名を以て獨創新曲高峰琵琶歌と言ふ蓋し予が五年の苦心を嘗めて歌曲共に一新機軸を創案したれば也何か故に好むで音楽界殊に琵琶界に新記録を作らんとする乎斯は予が多年の宿望あれば也予が從來彈奏しつつ在りし筑前琵琶あるものは其昔九州の蠻野にて天臺宗の僧侶に依つて彈奏されしものにて極めて淺薄幼稚なる宗教的歌曲少ながらざりし然るに星移り物變りて遂に今日一種の音樂として世に認めらるゝに至りたりと雖ども作歌は難硬且つ偏狹にして時代の思潮に伴はず節曲は無味淡々として聲樂として充分ならず彈奏は平凡

44. 0. 2

にして變化に乏しく以つて人の琴線を動かすに足らず一時世人の歡迎を受けたる傾向ありしも其は一時の流潮に過ぎずして早くも既に微々として振はざるの觀を呈するに至りたり矣

於之乎歌曲共に一新機軸を案出して現代思想に投合するの音楽と成し極めて普及的に何人にも琵琶趣味を了解せしむると同時に眠るが如き音楽界を覺醒せしむるの響鐘たらしめんとして茲に此の新曲を創案せり其如何に從來の琵琶歌と異なるかは予が彈奏の公開場に來聽あれと云爾

辛亥初秋東都赤坂の僑居にて

筑 風 識

凡 例

- 一 高峰琵琶歌は總曲・本曲・端曲の三種あり
- 一端曲は總曲本曲中の妙譜妙節を蒐めたる單歌にして最も艶に優に彈謠するものなり
- 一本曲は七五調よりかりし從來の筑前琵琶歌を變稱して高峰琵琶の本曲と云ふ
- 一 總曲は則ち今回新案の曲名にして歌中會話説明等の異例あり其外諸種の節譜あれども本篇は只だ句頭句下に附記しある略譜の説明に過ぎず

「流」……………流し

△……………合の手

┆……………續き

冠詞……………謠ひ始めの節

語……………説明

詞……………會話又は言葉

歌……………節曲

結尾……………終り及び止めの節

獨創 新曲 高峰琵琶歌

篠原嶺葉 作歌
高峯筑風 作曲

總曲 不如歸 上の卷

諸行無常と告げ渡る 鐘の響も音絶わて

啾音哀しき不如歸 雲井遙に過行けば

返子の濱邊の月暗しハ

爰に陸軍中將片岡子爵の令嬢浪子と云ふは

世にも稀なる美人であつて

海軍少尉川島武男と結婚せしが

夫婦の語らひ至つて睦まじく

歌 月に群雲花に風

任意にならぬが世の習ひ

結婚未だ日の淺きにも拘はらず

世にも怖るべき肺病に胃されて、相州は返子の海濱に在る

歌

片岡家の別荘にて病を養ふ身となつたへ

都の花は早やけれど

返子の邊は春閑けて

若葉の山に櫻咲き

白雲懸けし如くなり

語

此日は朝より春雨が降り出して

眼界一眸海も山も唯一色に打煙り

唯さへ永い春の日は一層永く思はれた

歌

されど良人武男が來ると云ふ約束があるので

それを切めての樂みに

今か今かご待甲斐も

暴風雨に何時か日は沈み

窓の外を眺むれば

黒白も分かぬ鳥羽玉に

雨は車軸と降り乱れ

風さへ強く吹き添ひて

荒れに荒れたる狂瀾怒濤

屏風の如き斷崖を

噛むでは碎け碎けては

珠と飛び散る物凄さ

宛ら万馬の跳るが如く

百の猛獸吼ゆるに似たり

流

海人が伏屋は戸を鎖し

風に瞬く燈火の

影もかすけき臥床にて

恨みつ泣きつ寝つ起つ

案じ煩ふ折も折へ

語

漸く武男が風雨の暗を衝いて來たので

直ぐに軍服を和服に着替させ晩餐も終り果て

一室に入つて相對して座に着いたへ

浪子は武男に打ち向ひ 歎ばしげに語るやうへ

貴方が……入來して下すつたので

何だか氣が清々爲ましてよ

も……少し……起きて居さして頂戴な

斯うして居ますと些ども病人らしくは無いでせうへ

言へば武男は悠々と 卷蓑を喫し微笑みつへ

それは當然ぢやないか川島ドクトルが附いて居るんだも

の……は、は……

しかし近來は本當に顔色が宜くなつたよ

もう恙うなつたら此方のものだ

少しも心配するには及ばないさ

互ひに語る折からにへ

襖を開けて入り來しは幾と呼びける召使へ

菓子と茶器とを前に置き いと嫺かに會釋してへ

大い暴風雨でございますことね

若も旦那様の……お入來がないと……ねエ……奥様

今夜なんぞ……迎もお眼が合はないでございませうねへ

言ひつゝお茶を進むれば 浪子は實にも首肯きつへ

本當に寢まれないわね……

しかしこんな晩に船に乗つてる人の心地はそんなでせう

ね…… だけれど乗つてる人を思ひ遣る人の心は

猶……悲しいわね……へ

何有に……これしきの風雨はまだ宜いが

南支那海あたりで二日も三日も大風雨に出會ふと随分耐へるよ……四千何百噸の軍艦が三四十度位に傾いて

山の様な大浪がごしんくと甲板を打ち越してさ

船が軋々と鳴り出すと餘り宜い心地は爲ないからね……

歌 加ゝる話の其の中に 風はいよよ吹き荒み

樹々の梢は枝を折り 逆巻く浪は髣髴と

家をも飛ばさん計りなり 三人はひたと口噤み

互ひに耳をぞ澄しける

詞 こんな晩はランプでも明るくして

愉快な話をするに限るよ

此方は横須賀より餘程暖いと思はれて

ひ……もうこんな山櫻が咲いたな

言葉に浪子は微笑みつ 花瓶に活けし山櫻

軽く撫でつゝ散際の 其清けさを賞めたたへ

思ひ浮べし蓮月の 詠み遣したる和歌一首

聲爽かに唄ひけり

「羨まし心のままに夙く咲きて

すかしくも散る櫻かな」

聴きし武男も興に入り 即詠なしつ聲高く

「しつこしと人は言へども八重櫻

さかり長きは嬉しかりけり」

歌の心を解き聞かせ 更け行く夜半と諸共に

互ひに笑ひ興じつつ いとも楽しく見ねにけり

流 「あれど浪子の身の上は

花や昔の花ならで

今は香も去り色も褪せ

露をも厭ふ風情にて

餘所の見る目も哀れなり入

語

かくて翌日になると昨夜の暴風雨に引かへてー

空は一點曇りもなき好天気ー

暫時なりと浪子を慰めて遣らうと、歸京は午後と定めー

午前の暖い間に運動に出掛けやうと言ふので入

歌

二人手に手を取りながら

裏口傳にはらく松の丘を越へ入

語

やがて磯馴松の立並んだ濱邊に出でー

遠近の景色を眺めつつ

新月形の濱邊をばー

人無き方へ歩むで居つたら

浪子は思ひ浮べしやう入

詞

あゝ……こんな病氣になりましたー

母様も嘸……お厭に思つて居らつしやいませうね入

歌

問へば武男は胸に釘

打つより辛き思ひなり入

語

何故辛いと言ふと……實は浪子へは明さぬけれどー

歸京する度毎に母の機嫌が次第に悪くー

肺病は傳染爲易いから成るべく返子へは遠ざかれと戒められたのみならず……ー

さまざまの壁訴訟の其の果は昂じて實家の悪口となりー

少しでも宥めやうとすれば妻を庇つて親に反抗する痴者

ど……罵られた事が度々あつたからである入

歌

されど武男は何氣なく

色にも出さず打笑ひ入

ハア……浪さんも色々な心配をするね……ー

そんな事があるものかへ

歌 心盡して身を護り

又來ん春は母共に

吉野の山や嵐山

大和嶋根の武士と

散るを争ふ山櫻

探ね訪ばと語りつつ

歩むともなく歩む中へ

註

いつしか濱邊外れに出たが浪子は礫と立佇り

此處まで來たを幸ひに不動が森まで行かんと言へば

武男は浪子の手を扶け葛折なる岩道を辿り辿つて

漸くに小さな瀧の傍へ出た……見れば横手にいと寂びた不

動の御堂が在つて繪に在るやうな老松が崖から海を覗い

た其絶景……二人は岩に腰掛けて四方の景色を眺むるにへ

歌

正午に近き大空は

長閑に晴れて雲もなく

流 後は青葉生ひ茂り

晩春惜む鶯の

流

啼音もいと哀れにて

前は名に負ふ相模灘

女波夫波も音立てずへ

浪間縫ひ行く浪千鳥へ

流

「聲も優しくちちと鳴く

實にも海山諸共に

春の恵を身に浴びて

眠るが如き風情なり」

浪子は景色に打たれけん

思ひ餘りし様子にてへ

詞

貴方……私の病氣……癒りませうかねへ

歌

問へば武男は顔眺めへ

詞

癒らなくツてどうするものか……癒る……

癒る……此度癒るよへ

歌

勵ます辞聞くよりも

浪子は良人に取絶り

溢るるばかり涙含みへ

詞
ですけれど……母も此病氣で亡くなりましたからー

ひよつとしたらば私も……此まま……此の病氣で……へ

歌
言ひも了らす顔に袖へ

會話
心配しなくつても屹度癒るよ醫士も癒ると言つたぢやな

いか……母様は此の病氣で亡くなられたか知らんがー

浪さんはまだ花の盛りぢや……ー

病氣は氣から起ると云ふから癒ると云ふ確信があれば如

何なる病氣も屹度癒る……癒らなくつて何うするものかへ

歌
武男は浪子の手を取りて いとも優しくなだめけりへ

語
見れば瘦せ細つた浪子の左手には……結婚の以前……ー

武男が贈つて遣つた金剛石の指環がー

日に照らされて燦然と輝いて居るへ

歌

二人は暫し辞なく 深き思に打ち沈み

見上げ見下す顔と顔 光るは指環の石のみか

溢るるばかり眼に持ちし 涙の露ぞ光るなり

折しもあれや江の島の方より 白帆を揚げし船一つ

聲張上げて唄ひつゝ 静けき海を滑り行くへ

迎變るまいや二人が中は

分 此世ばかりか彼世まで

遠ざかり行く歎乃を 聞きし浪子は身につまされ

ほろりと落す一雫 武男も心推し暈り

覺ぬす涙浮べけりへ

詞

汗々……人間は何故死ぬのでせうねー

生きたいわ……千年も萬年も……ー

死ぬなら貴方と二人でね……二人一緒に死にたいわ……
浪さんが亡くなれば……僕もこのまゝ生ては居ないよ……

貴方……それ本當……嬉しいわね……

ですけれど……母様も居らつしやるし……

お職分もあるし……然う思つて居らしても……

自由にならないうでせうね……其の時は私だけ……

先に行つて……待たなきやならないと思ふと……

悲しくなつて了いますわ……私が死んだら……

時々思ひ出して下すつて……
武男は涙振り拂ひ

浪子の髪を掻い撫でつ

もうこんな話は舍さうぢやないか……縁喜でもない……

それよりか……早く養生して……ねえ……浪さん……

全快して金婚式でも挙げやうぢやないか……

浪子は堰き来る悲しさに 遺漸なきまで身を悶へ

死んでも……私は……貴方の妻ですよ……

必ず見棄てないで下さいね……

未來の未來の後までも……

私は……貴方の妻ですよ……

武男の手をば我手にて 轟とばかりに握りしめ

熱き涙をはら…… 聲も哀れに啼きにけり

一さても浮世は夢の夢 明日をも知れぬ人の身は

風に吹かるる燈火の いともなき命かな

肝々哀れなる一節よ 聞くも語るも涙なり

聞くも語るも涙なり

不如歸

中の巻

冠詞 風無きに音なく散るや桐一葉 物の哀れはそれのみか
 一度無情の風吹けば 老も若きも隔てなく
 五魂六魄消去りて 遺るは哀れ姿のみ

歌思へば夢の浮世なりへ

頃は七月七日の夜

鐘の響に夜は更けて

四更間近き頃なりしへ

片岡子爵家に在つては部屋と言ふ部屋には残らず燈火を
 點けて多くの人が寄集ふて居るが
 言ひ合した如く唾さ合つて聲を出して物言ふ人は誰一人
 としてない……爲に邸内は寂々として人が居ると思

へぬばかりの静けさである

こは何故かと言ふに……川島家から肺病の故を以て離縁さ
 れた令嬢浪子の病氣が革つて今や生命危篤に瀕して居る
 からであるへ

歌二年近き思いに

花の色香は痕もなく

瘦せ果てし身は彌瘦せて

骨は露はに肉は落ち

蒼白みたる其の顔は

透き徹るまで青白く

唯緑なす黒髪

昔ながらに艶々

枕に垂るる哀れさよへ

枕頭には白衣を着た看護婦が氷に和せた葡萄酒を筆に含

まして時々浪子の唇を濡して居る

傍には今一人の看護婦と共に憂に枕む片岡夫人を始め伯

母に當る加藤子爵夫人や従妹に當る千鶴子が控へて

老女の幾は涙ながら靜に浪子の足を摩つて居る

歌 夜は深くと更け行きて
いと静けき室内は

咳洩らす人もなく
列居る人は皆共に

愁の眉を顰めけり
浪子は呼吸の苦しげに

流 「漸次に迫る其態は
秋の枯野に鳴く虫の

やがて消ゆべき身を嘆つ
それにも増して哀れなり

暫くありて眼を開き
微な聲を洩らしつつ

詞 伯母様は………

此處に居ますよ………

詞 涙を拭ひつつ傍に寄つたのは加藤子爵夫人である

看護婦が薦める椅子に腰を掛けて

詞 何か御用がありました………

はア……… 誰にも秘密で貴方へお願い申したい事がある

りますの………

左様かい………では一寸お待ちなさいよ………

詞 それと察した夫人は看護婦を始め列居る人を室外に去ら

しめ………浪子の額にかかる後毛を徐に撫で上げながら

溢るるばかり涙を満へて今更の如くしげと顔を眺め

て居る………浪子も熟々と夫人の顔を見上げて居つたが

歌 涙と其にわなくと

詞 頭へる手をば差伸して梳の下から一封の書面を取出し

伯母様………ををか………私が亡くなつた後でこれを武男さんへ

届けて下さいませんか

夫人はハンケチ取出して浪子の涙を拭ひ遣り其身も共に
拭ひつつ書面を確と懐中に納めへ

届けるよ……屹度武男さんへ手渡しするからね……
安心なさいよ……へ

それからね……此の指環は……武男さんだと思つて持つて行
きますよ……へ

示すは紀念の指環にて 去られて後の今日までも

片時離さぬ品ぞかしへ

加藤夫人は餘りの傷はしさに湧き来る涙はら
あゝ……いいとも……持つて往らつしやいよ……へ

浪子は安心した様子で苦しげな吐息と其に眼を閉ぢたが
暫くすると又見開いて……へ

どうして居らつしやるでせうね……へ

忘れ兼た如く武男の安否を問ねた

武男さんはね……もう臺灣に着いて屹度此方の事を思つて
居らつしやるでせうよ……へ

近くに居らつしやるものなら何うともして逢はして遣り
たいと……お父様も然う仰つて居らしやるのだけれど何
分にもね……しかし浪さん貴方の心は屹度私が傳へるから
ね……必ず安心して居らつしやいよへ

聞きし浪子は微なる 笑に感謝の意を見せつ

忽ち色なき顔容は 美しきまで紅くなり

熱き涙を流しつつ……へ

あ々……辛い辛い……もう女なぞには生れはしませんよ

あ々……辛い……辛い……入

瘦せたる手にて胸押へ

身を悶々つつ苦しめり

加藤夫人は氣遣はしさうに主治醫を呼びながら葡萄酒を
含ませやうとしたがへ

浪子は其手に取廻り

僅に身をば起しつつ

生命縮むる咳嗽共に

肺を絞りて苦しげに

吐きしは何か紅の

花にも似たる血なりけり入

吐き了るが否や忽ち慄々として床の上に打ち倒れて了つ
た……一同は驚き周章て枕邊に寄集ひ

醫士は看護婦を指圖して應急手當を施した後
臥床に近き玻璃窓を左右に蠅と開くと爲に涼しい風が水
の如く室内に流れ込むで来る入

窓の外を見上ぐれば

今宵は織女赤牛の

二つの星が鶴の

橋を渡りて一歳に

一度契ると傳へ聞く

銀河流れて空は澄み

「星の光りもいと清く

されど浪子は臥床にて

死ぬる臨終の際までも

良人慕ふて悶へ泣き」

「哀れ身に泌む其態は

月に焦れて啼き叫ぶ

八千八聲の不如歸

血を吐く如き風情なり」

父中將を首として……子爵夫人……并に加藤夫人千鶴子駒子

老女の幾に至るまで病床を取巻いて列んで居る入

歌そよ吹く風は心なく

死せるが如く横はる

浪子の髪を戦がして

見るに堪へざる不便さよ入

醫士は瀕りに病人の顔を眺めて居つたが……やがて靜に

脈搏を診た……看護婦の照らして居る燈火は……
 はたくと風に揺めいて……十分過ぎ十五分過ぎ……寂寥た
 る病室は微に苦しそうな吐息が聞えて浪子の唇は僅に動
 いた……それと見た醫士は手づから一匙の葡萄酒を口
 中に注ぐと忽ちばつちりと眼を開いて……
 理由も分らない囁語のみを言ひ續けて居る
 醫士は中將に胸せして片隅に退けば……中將は早くも臨終
 の近づいたのを知つて……静に枕頭に進み寄つて浪子
 の手を握り……

浪子……気が附いたか……お父様ちやぞ……
 皆なも此處に居るぞ……

歌 千軍万馬を事とせぬ 鬼をも挫ぐ英雄も

我娘を思ふ愛惜に 覺ゆる涙浮べけり

空を覗めた浪子の眼は聲する方を探ねるやう次第に動い
 て漸く中將の顔を認め

お……お父様……私……もう……お別れ致します……
 ……お躰を御大切に……

歌 此世の別にはらくと 父の手を把り涙を流す

詞 母様は……

語 苦しげに母を尋ねれば夫人は直に進み寄り……

詞 お……浪さん……私に分りますか……

用 浪子は僅に首肯して其の手を探り

結 お母様……色々お世話を掛けましたが……もうお別れ致し
 ます……

歌 言ふも哀れや虫の息へ

語 夫人は物をも得言はず顔に袖を當て、退いた

加藤子爵夫人は泣き倒れて居る千鶴子を勵まして

交るゝ進み寄つて別を告げ……妹の駒子も進んで病床の

傍に跪くと……浪子は頭く手を伸して……

其前髪を撫でながら……

詞 駒ちゃん……私がね……亡くなつた後は……

どうか……お父様や……お母様を頼みますよ……

言ひ了つて苦しげな息を吐いたので駒子は涙ながらに一匙の赤酒を唇に注いだ……

此時末座に泣き崩れて居た老女の幾は堪へかねて傍に進み寄つたが……浪子の手をば轟とばかりに兩手に握り締めへ

詞 た嬢様……

お……姥や……

は……い……私も御一緒にお供を致しますへ

歌 言ひも終らず泣き沈むへ

語 それを漸く次の室へ退かした後は水を打つた如く深々と

して居るへ

歌 浪子は目を閉ぢ口を閉ぢ 末期の影は刻々に

変れし顔を掩ひけりへ

語 中將は再び進み寄つて……

詞 浪……何にも言ひ遣す事は無いか……

氣を確に持て……

歌 懐かしき父の辞や通じけんへ

語僅ただに開く眼色まなこは傍そばに立つて居た加藤夫人に注いだので
夫人はたまりかねて浪子の手を確と握りへ

浪さん……何も彼も……私が受合つたからね……

安心してお母様の傍へお出でなさいよ……

淋しみしき笑の唇に
上ると見れば今は早や

眠るが如く息絶へて
幽界ゆうかいの人と成りにけり

列居る人は今更に
よゝごばかりに泣き伏して

盡つきぬ名残を惜みけり
折しも月は雲に入り

流「星の川さへ影暗く
花を散らせし嵐をは

怨うらむか如く泣く如く
いごご淋しく見おにけり

結尾けつびさても悲しき不如歸
實にも血を吐く思ひなり

實にも血を吐く思ひなり

不如歸

下の巻

冠野かむらの秋の千草も枯れ初めて盛土もりつち高き奥津城おくつちに

素木すきの墓標かぶ文字黒く
香煙かえん縷々るると棚引たなひきて

吊ぶらふ虫の聲こゑ愁しへ

歌頃ころしも今日は霜月の
新嘗祭にいなめの日なりけり

都みやこの空は秋高く
戦いくさとの風も吹かざれば

大路おほみち小路こみちの軒のきの端はに
靡なく御旗みはたも静しずなりへ

語時ときは丁度午後二時頃の事であつた

右手に白菊を提げた海軍士官が青山南町の方から共同墓
地へ向けて入つて来た

こは別人ならず海軍大尉川島武男である

歌 軍艦の中にて手に取りし 加藤夫人の音信に

浪子の死をば知りしかど 家をも身をも打忘れ

唯君の爲め國の爲め 生命捧げし大丈夫が

私事を顧ふの暇なく 心ならずも打過ぎて

漸く上陸なしにけるへ

語

ために今日は加藤夫人を訪れて午過ぎる頃迄浪子が臨終の物語を聞き斷腸の思ひに涙を流し今其墓参に來たのであるへ

歌

午後の日光は墓地に照り 紅く染たる櫻葉の

はらりと落ちて日は悠に 離に咲ける茶山花の

流

一香ほのかに匂ひつゝ、 彼方此方の樹の枝に

小鳥の啼音いと床し」

語

今一臺の車が霞町の方へ過去つた後は寂な墓地が一入靜になつてへ

歌

唯駭々ど打騒ぐ 都會の器と仇野の

滅入るが如き淋しさと 其に和りて人の世の

悲しき歌を奏でけりへ

語

折しも二十七八の婦人が涙の目を赤くして

七歳ばかりの水兵服を着た男兒の手を引きながら武男と

摺れ違つて五六歩行過ぎたと思ふ頃へ

詞

母ちやん……彼の小父さんも彌張海軍ね……へ

あゝ……彌張海軍ですよ……へ

歌

婦人は手巾顔に當て 涙ながらに去りにけるへ

語

同情深い武男は氣の毒さうに其姿を見送つて又歩み出し

たが道を考へる如き状態で……屢立止つては新らしい墓標
 の表を読みながら……やがて一等墓地に出たが松と櫻
 を植へた立派な塋域の前に往つて頷いて立止つたへ
 歌垣の小門を押排き 力なくノ、進み入るへ
 語 見れば正面には年を経た石塔が在つて横手に新しい墓標
 が立つて居る

其の上に常盤の松が青々と枝を翳して其の下に

黒痕鮮に……片岡浪子之墓と筆太に記してあるへ

歌 簇々として立ちし卒塔婆の風なきにへ

馬 動くが如く見ゆるにぞ武男は之れを打眺めて石の如く突
 立つたが……やがて唇を顫はせながら……
 はらくと涙を零して我を忘れて泣き悲むたへ

歌 在りし昔の面影は

縁結びし大禮の

伊香保の山に主従が

不動が森の岩の上に

逗子の濱邊の夕月に

白きハンケチ打振りつ

流 言ひし言葉の今も尙

一度歸りし其の時は

流 「二度歸りし其時は

變る姿と成果てし」へ

泣き愁しむも道理なりへ

詞 汗々……残念だ……浪さん……お前は何故死んだへ

今日のあたり浮び来て

花の姿を始めとし

巖を狩りし遊びより

堅く誓ひし言の葉や

船と陸とに呼び交はし

早く歸つて頂戴と

耳に残れぬ情けなや

既に我家の妻ならず

最早此世の人ならず

いとし浪子の身の上に

語 覺ぬす幕標に取絶つて潜々と涙を流したへ
折しもあれや一陣の 風は頭上を吹き渡り

櫻の枯葉片々と 幕標を撲つて翻へるへ

武男は不斗心附いて涙を拂ひながら幕標の傍に進み寄り
萎れかかつた花立の花を抜き捨てて……

手に提げて居る白菊と取換へ手づから落葉を拂ひ除けた
後軍服の衣兜から一通の書面を取出して打擴げた

これは浪子の絶筆であつて今日加藤子爵夫人の手から受
取つたのであるへ

美しかりし水莖の 跡もしごなき假名書は

在りし浪子の筆ぞとも 思へぬばかりに文字乱れ

墨は滲みて打震ひ 彼方此方にあると

涙の痕を見ゆるなりへ

語 武男は切てももの思出に涙ながら浪子の手紙を読み始めた

最早や最後まで遠からず覺候まゝ一筆残し参らせ候

……今生にては御目もこの節もなき事と存候處……天

の御憐みにて先日は不慮の御目もと申上げ嬉しく

……併し汽車内の事として

何も心に任せ申さず……

誠に御残り多く存上参らせ候へ

歌 列車の窓に身を悶ぬ 董色したハンケチを

投げし當時の光景は 目にありくと浮ぶなりへ

語 儘ならぬ世に候へば何事も不運と存じ誰れも恨み申

さす……へ

歌 一句讀みては聲を吞み

二言讀みては歎なげき

果は涙のはらくと

手に持つ文に注ぐなりへ

このまゝに身は土と朽ち果て候とも魂は永く御側に

付添ひ……………へ

歌

こゝまで讀みし折も折へ

詞

た父様……………誰か來てますよ……………へ

語

愛らしい聲が聞けたと思ふと引續いて……………へ

詞

お父様……………川島の兄さんです……………へ

語

言ひつゝ花を提げた十歳許の男の兒が武男の側へ走り寄

つて來た……………へ

武男は其の聲に驚いて遺書を持つたまゝ涙を拂つて見返
へると恰も入口に突立つた片岡中將と顔見合せたへ

歌

武男は萬感胸に充ち

顔見る力なく……………も

其のまゝ下を俯向けりへ

語

中將は忽ち進み寄つて武男の手をひんすど握つたへ

武男は驚きながら顔を仰げたが……………中將の眼には溢るゝば

かり涙が見わたへ

詞

武男さん貴方も辛かつたらうが……………私も辛かつた……………へ

歌

互に手をば握り締め……………二人の涙滴々ど

幕前の土をぞ濡らしけるへ

語

やゝあつて中將は涙を拂ひ武男の肩を軽く敲き……………へ

詞

武男さん……………涙は死んでもな……………へ

私は彌張い……………貴方の爺ぢや……………へ

前途遼遠ぢやから……………確い頼んますぢ……………へ

はい……有難うございます……
ごうちや……武男さん……久し振一處に往つて寛々臺灣の話
でも聞かうか……

はい……

歌
折しもあれや彼方なる

途を隔てし樹間にて

詩吟の聲のいと優に

手に取る如く聞ゆけり

秋月蕭然向幕前

墨痕在手轉愁傷

擧頭形影芒難去

低首聲音長不忘

櫻樹園碑飛枯葉

青松綠暗掩驅牆

捧香追憶千行淚

忽聽晚鐘響落陽

二人は顔を見合して

又も涙を落しけり

流「されど黄泉へ逝きし身は

泣けど叫べど聲もなく

答ふるものは武藏野の

草葉の蔭に鳴く虫の

聲より外はなかりけり

噫文人のすさびにて

結尾
四絃に残る物語

人の袂を濡らしけり

人の袂を絞りけり

明治四十四年八月廿四日印刷
明治四十四年八月廿八日發行

著作權
作曲權
所有

著者 篠原 璽 瓏
東京市麻布區箕笥町二十三番地

兼作曲者 鈴木 徹 郎
東京市赤坂區田町七丁目三番地

印刷者 中村 三之助
東京市麻布區谷町十二番地

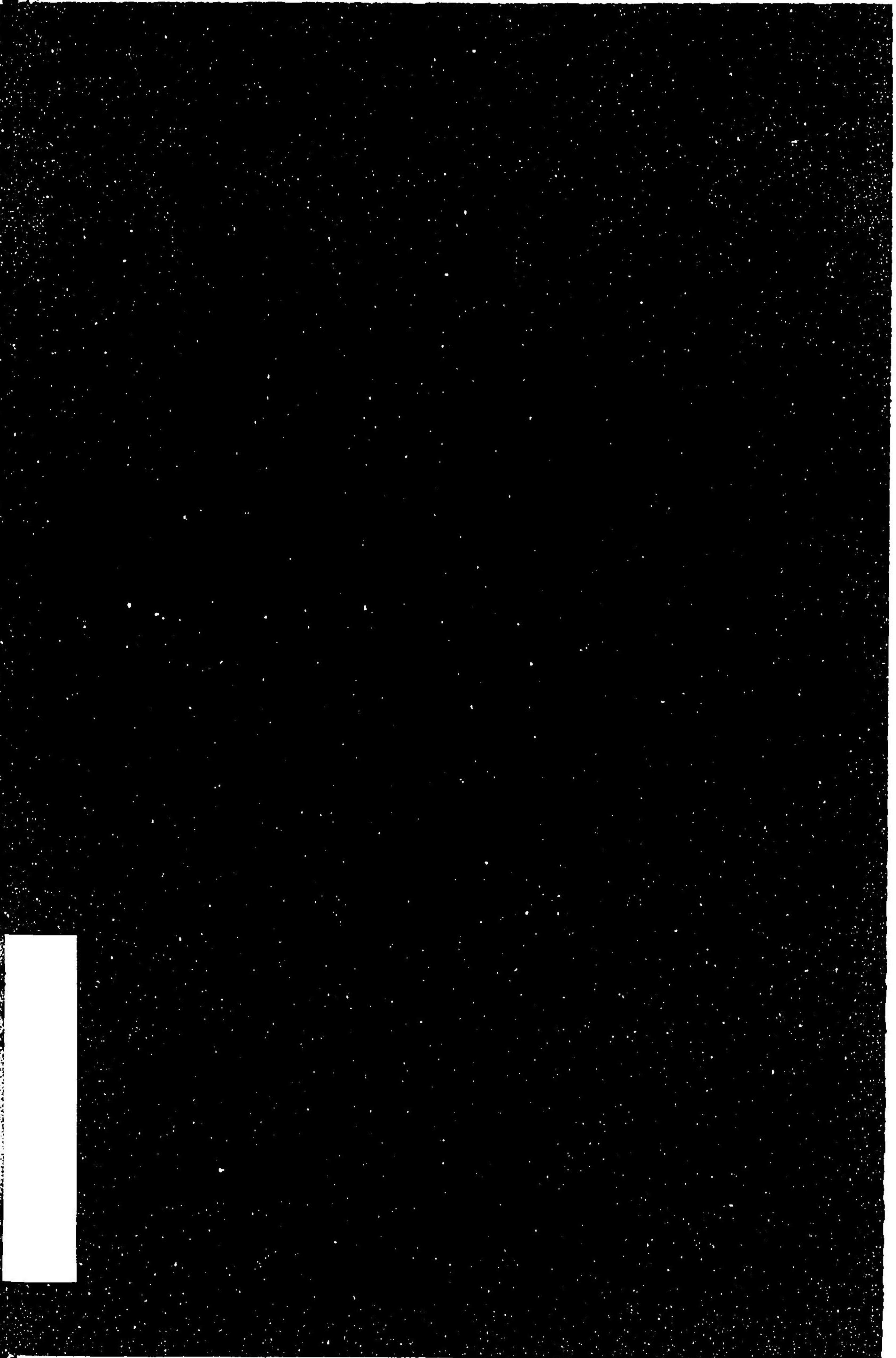
印刷所 豐成 堂
東京市赤坂區田町七丁目三番地

發行所 天聲 會

267

204





特45
612

独創新曲
高峰琵琶歌
国立国会図書館

074689-000-3

特45-612

高峰琵琶歌 第1卷

篠原 嶺葉 / 歌

高峰 筑風 / 曲

M44

CEJ-0208

